

フジツボ養殖に手応え

八学大の鶴見教授「実用化目指す」

八戸学院大地域経営学科の鶴見浩一郎特任教授(65)は、高級食材フジツボの養殖を研究し続けている。対象は食用に適した大ぶりの「ミネフジツボ」。研究は今年で14年目を迎え、幾多の失敗を乗り越えてきた鶴見氏は「漁業、飲食、観光の3方に貢献できる。人工種苗の配布による養殖実用化を目指す」と、栽培技術確立の手応えを語る。

(工藤文一)



プラスチック板に着生したミネフジツボ
＝2日、階上町



ミネフジツボの研究に取り組む八戸学院大の鶴見浩一郎特任教授

震災や失敗乗り越え奮闘

フジツボは貝類ではない甲殻類に属し、エビやカニに似た味わいという。特に、ミネフジツボは可食部分の大きい身や汁が日本酒と相性抜群。青森市や八戸市などの一部飲食店で提供されている。

地元の左党は言うに及ばず首都圏の食通にも人気は高い。しかし、市場の流通が安定せず浜値も高値で、この1、2年は水揚げ減から高騰気味という。

食味の良さにほれ込んだ鶴見氏は2009年、民間企業から北里大海洋科学部(岩手県大船渡市)の研究生に転身し、研究に着手。11年2月には、人工的にミネフジツボの幼生をプラスチック板に付着させ、変態させることに成功した。

だが、同年3月の東日本大震災で北里大海洋科学部

が被災し、鶴見氏は愛媛大に移籍。17年に八学大へ移り、地域貢献を目指す八戸学院プロジェクトとして、青森県栽培漁業振興協会(階上町)や民間企業と協力し研究を続けている。

ミネフジツボは毎年12月に産卵、ふ化した幼生は遊泳しながら植物プランクトンを食べて脱皮を繰り返す。1、2月ごろ岩などに付着、変態。稚フジツボとなり2、3年後の夏秋には食べ頃の大きさに成長する。鶴見氏は失敗を重ねながらも、餌の工夫などで問題を一つ一つクリアしてきた。

目標は殻の底の直径が4センチ程度となる出荷サイズまで育てること。数年前から沿岸で試験栽培を続けており、「来年か再来年には安定した種苗生産ができる見込み」とゴール間近の状況を強調する。

ミネフジツボはいったん着生させた後は餌やりが不要。栽培方法が確立されればホタテやカキ、ホヤなどの養殖技術を持つ漁師なら比較的容易に手がけることができるという。砂浜の海岸は生存密度が低いものの、二陸沿岸には広く生息。太平洋側でも種苗からの育成は可能とみられる。

陸奥湾ではホタテ養殖にとつて厄介者のイメージが根強いが、「ミネフジツボを養殖できればホタテの10

倍の値で売れて、漁業者の所得向上につながる」とアピール。

その上で、「高級食材として生産、流通、食文化が成立しているのは青森のみ。素晴らしい可能性を秘めた資源を育てれば地元の魅力も高まる」と、コロナ後の観光客誘致といった経済効果に期待を寄せた。